The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	虹の向こう側の「世界」：D・H・ロレンス『虹』と帝国主義
Author(s)	霜鳥, 慶邦
Citation	言語文化研究. 2023, 49, p. 71-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90946
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

虹の向こう側の「世界」
―D・H・ロレンス『虹』と帝国主義―

霜　鳥　慶　邦

The 'World' beyond the Rainbow: D. H. Lawrence's *The Rainbow* and Imperialism

SHIMOTORI Yoshikuni

This paper explores the relationship between D. H. Lawrence's 1915 novel *The Rainbow* and imperialism by examining the expanding dynamics that inform both the novel and empire, the text's self-conscious description of the 'whole', the relation between individual and empire, Ursula as an ambivalent (and even contradictory) figuration of imperial ideology, Lawrence's experiences as 'a traveller on the face of the earth'. Contextualizing and historicizing the novel and opening up its textuality to the 'world', the paper demystifies and deconstructs the aesthetic symbolism of the rainbow, or 'the world built up in a living fabric of Truth'.
キーワード：D・H・ロレンス，『虹』，帝国主義

> '[Y]our Pan-Germanism is no more imaginative than is our Imperialism over here. It is the vice of a vulgar mind to be thrilled by bigness, to think that a thousand square miles are a thousand times more wonderful than one square mile, and that a million square miles are almost the same as heaven. That is not imagination. No, it kills it.'
>
> ―E. M. Forster, *Howards End*

1.「広がりゆく輪」，膨張する帝国（1）

D・H・ロレンス（D. H. Lawrence）の『虹』（*The Rainbow*, 1915）は，19世紀中葉から20世紀初頭のイングランドを舞台に，ブラングウェン家の三代の物語を展開する。この小説の主要テーマは，人間と自然が一体となった農牧生活を送る一方で微かな変化が芽生える冒頭場面に

提示される。自然との交感に浸るブラングウェン家の男とは対照的に，女は，村の遥か向こう側に広がる大きな世界を眺める。

> [S]he strained her eyes to see what man had done in fighting outwards to knowledge, she strained to hear how he uttered himself in his conquest, her deepest desire hung on the battle that she heard, far off, being waged on the edge of the unknown. She also wanted to know, and to be of the fighting host.（11）

ホーマー・O・ブラウン（Homer O. Brown）は，上の一節の語彙を用いながら，小説全体に通底するモチーフを次のようにまとめる—— ‘This constant impulse to reach toward what is beyond, to enlarge one’s scope and range and freedom by waging battle on the edge of the unknown, carries the seeds of the development of *The Rainbow*, which moves constantly toward a greater range and circle of consciousness: hence, the importance of the word “unknown”’（216–17）. ブラウンが挙げる「未知（unknown）」だけでなく，テクストは，‘beyond’，‘far’，‘elsewhere’，‘foreign’，‘strange’といった語を多用し，遥か遠隔の未知なる地への強い憧憬を印象づける。

ここで指摘したいのは，ブラウンの説明——これは『虹』の標準的理解の代弁でもあると言えるだろう——は，『虹』のエッセンスを的確に要約する一方で，それがより大きなテーマの一部であることに関心を向けないまま終わってしまう点だ。具体的には，上の『虹』からの一節は，明らかに，エドワード・サイード（Edward Said）が言う「未知への探究の旅といった植民地文化の大いなるトポス」（30）と強烈に共鳴している。ハワード・J・ブース（Howard J. Booth）も，上の『虹』の一節が「海外植民地征服の語彙」によって補強されていることを指摘する（‘*The Rainbow*’ 41）。さらに，「未知の世界の縁での闘いを通して自身の範囲と射程と自由を広げ」ようとする衝動は，このテクストをとりまく時代状況である帝国主義の基本原理である。たとえばサイードは，「休みなく拡大」し，「仮借なき統合」を推進する「帝国」の性質と，「帝国世界の全体」を把握することの困難さについて述べる（6）。またハンナ・アーレント（Hannah Arendt）は，『全体主義の起源』（*The Origins of Totalitarianism / Elemente und Ursprnge totaler Herrschaft*）において，「政治の不変最高の目標としての膨張が帝国主義の中心的政治理念である」と指摘し，「永久的膨張という帝国主義の冒険は初めから無限と見なされ，資本主義的生産自体の運動過程に組み込まれるべきもの，一時的危機の克服に終わらないものとされていた」と述べる（9, 57）。アーレントが引用するセシル・ローズ（Cecil Rhodes）の「膨張こそすべてだ」「できることなら私は星々を併合しようものを」（5）という言葉は，植民地主義的政治観に潜む「狂気」と「膨張にとっては地球の大きさの有限性が障害でしかないという［……］帝国主義の運動原理」（6）を端的に表わしている。さらに，モダニズムと帝国の関係について論じるパトリック・ウィリアムズ（Patrick Williams）は，「モダニティ，資本主義，植民地主義」に

共通する特徴として，「膨張の力学」を挙げる（28）。

『虹』のテクストの内部と外部で同時に作動する「膨張」あるいは「拡大」の原理を踏まえれば，おのずと，この小説を次の観点から読み直すことの可能性と必要性が浮上してくるはずだ——『虹』の物語世界において，ブラングウェン家の三代にわたる登場人物たちが，遥か遠くの未知の世界への憧憬を抱いて「自身の範囲と射程と自由」を広げていくとき，そして（小説の章題として二度も使用される）「広がりゆく輪」が登場人物たちの意識と行動をより広い世界へと導いていくとき，物語内で起こる拡大現象は，テクストをとりまく帝国主義の「膨張」のダイナミズムとどう共振しているのか。この読みのアプローチは，サイードが『文化と帝国主義』（*Culture and Imperialism*）で実践した読解から多くを学んでいる。それは，「文学そのものが，自らがヨーロッパの海外拡張に何らかのかたちで参加していることをたえず自己言及し，帝国の実践を支援し精妙化し強化するような，まさにウィリアムズの言う「感情の構造」を作り出す」様子を探究すること，換言すれば，「正典を，ヨーロッパの膨張に対するポリフォニックな伴奏として」読むことである（14, 60）。さらに本稿の読みは，フレドリック・ジェイムソン（Fredric Jameson）によるモダニズムと帝国主義についての論にも負うところが大きい。ジェイムソンによれば，海外植民地の拡大によって，「経済システム全体の重要な構成部分」が，「宗主国の彼方の別の場所」，「母国での日常生活と実存的体験の外部」，つまりは「海外植民地」という「未知」で「想像不可能」な場所に位置することになり，この「空間的乖離」のために，「システムの機能の全体」を把握することが不可能になる。モダニズムは，この回復不可能な「欠如」に起因する「形式的矛盾」あるいは「形式的ジレンマ」に取り組むことになる（*The Modernist* 157–58）[1]。ジェイムソンの記述の中の「彼方の（beyond）」，「別の場所（elsewhere）」，「未知（unknown）」，「全体（whole）」といった語が『虹』に複数回にわたって登場する鍵語でもあることは，この後の議論に深く関係してくるはずだ。

たしかに従来の研究も，この小説の政治性について論じてはいる。だがその多くが，キャラクターの言動を中心とする物語の内容レベルと歴史的背景に関心を向けるのみで，その結果，たとえば軍隊に奉仕する工兵スクレベンスキーは国家主義者であり，彼の主張に反対するアーシュラを通して小説は国家主義と戦争を批判しているという，想定の範囲内の結論に落ち着く傾向が強かった[2]。この小説の政治性をより緻密かつラディカルに精査するには，キャラクターを人物（フィギュア）＝形象として捉え直し，テクストの美学レベル・形式レベルに焦点を当て，サイードの言う「姿勢と言及の構造」（xxiii）に着目し，「膨張」する帝国の「全体」の表象（不）可能性の問題に取り組みながら，テクストを読み直す必要がある。このような分析作業を通して，『虹』と帝国主義の関係について，従来の作品解釈とは一線を画した新たな知見を提示することが，

1）ジェイムソンの論を踏まえた『虹』の分析例として，Booth（‘*The Rainbow*’）の論考がある。

2）ここにすべての例を挙げることはできないが，たとえば本稿の参考文献に記載の『虹』の先行研究も，多くの示唆を与えてくれる一方で，小説の政治的読解の点では，その多くが，本文に記した傾向に当てはまる。

本稿の目的となる。

2．全体性，一元性，多元性

前節で設定した本稿の目的を遂行するための準備作業としてまず確認しておくべきことは，この小説が権威的全体性のテーマについてきわめて自意識的なテクストであるということだ。その特徴が最も明確に前景化するのが，第 7 章のリンカン大聖堂のエピソードだ。大聖堂内部の「完璧な子宮」（186）のごとき空間で「永劫の恍惚」（188）に浸るウィルに対し，アナは，大聖堂の内部に刻まれた小鬼の顔の群像に気づく。「邪悪」で「狡猾」な表情の小鬼たちは，大聖堂を「絶対的」な存在とみなす人間たちの「幻想」に反駁し，教会の内部に包摂しきれない多くの要素が存在することを暗示し，人間を「嘲笑っていた」（189）。「祭壇へと躍動する偉大な衝動」とは別に，小鬼たちの顔には「独立した意志，独立した動き，独立した知」が表れており，「自らの矮小さ」を「勝ち誇り」「笑って」いるかのようだ（189）。このエピソードでは，結果的に，大聖堂を「天地のすべてを抱擁する絶対的存在」（190）と信じるウィルの幻想は打ち砕かれ，ウィルは，それが「世界の中の世界（a world within a world）」（190）にすぎないことを思い知らされる。

このエピソードの解釈のためにしばしば参照されるのが，『虹』とほぼ同時期に執筆された「トマス・ハーディ研究」（‘Study of Thomas Hardy’）の次の一節だ―― ‘There was, however, in the Cathedrals, already the denial of the Monism which the Whole uttered. All the little figures, the gargoyles, the imps, the human faces, whilst subordinated within the Great Conclusion of the Whole, still, from their obscurity, jeered their mockery of the Absolute, and declared for multiplicity, polygeny’（454）. アン・ファーニハウ（Anne Fernihough）は，この一節を引用し，ロレンスの美学を「建築物の全体性という「一元論」の転覆」（43）と呼ぶ。ただしロレンスは，上の一節の直後の一文（ファーニハウが引用に含めなかった一文）でこう記している―― ‘But all medieval art has the static, architectural, absolute quality, in the main, even whilst in detail it is differentiated and distinct’（454）. つまりたとえ小さな邪鬼たちが一元論的全体性に反駁しようとも，その抵抗要素自体が，そもそも全体性によってその内部に存在することを許された存在であるということだ。この点を踏まえると，トニー・ピンクニー（Tony Pinkney）による次の説明のほうが，大聖堂の複雑な特徴をより正確に表現していると言えるだろう―― ‘[E]ven the sly stone faces that denounce its [the Gothic’s] incompletion are, after all, part of it. The Gothic contains its own “negation”, which thereafter ceases to be its negative pure and simple, and is rather granted local validity within a more generous total system which exceeds it’（73）. リンカン大聖堂のゴシック建築の意義は，一元論的全体性の支配か多元論の勝利か，という二者択一の問題ではなく，両者の間の緊張感に満ちた関係に対するメタ的自意識にこそあると言えるだろう。

大聖堂に見られるメタ的自意識は，変奏しながらテクスト中に反復される。その一例が，アーシュラが勤務することになる小学校だ。それは絶対的な「権威」と「権力」をもつ校長を頂点とする「非人間的」で「醜悪」で「不潔」な「システム」であり，アーシュラは「牢獄」のような環境に激しい戸惑いを覚える（351–53, 357）。そのようなアーシュラに対して，生徒たちは「敵意」を向け，彼女の「権威」を「嘲笑」し，反抗する（349, 358）。次第にアーシュラは「個人的自己」を放棄し，システムの中の「道具」，「抽象物」と化していき，「学校の内部だけがリアル」だという感覚に支配され，ついに反抗的な生徒に鞭で体罰を与えるようになる（356–57）。アーシュラは内心では，生徒たちが校則をすべて破ることすら望む一方で，「邪悪なシステム」の一部として「残忍」な人間と化さねばならない自分に嫌悪感を抱く（377）。このエピソードでは，大聖堂が学校へ，小鬼たちが生徒へと姿を変えて登場している。そして両者の間に立つアーシュラは，機械的・非人間的システムとそれへの嘲笑的抵抗との間で葛藤する。

別の例が，アーシュラが通う大学だ。「遠い」地の「魔法の国」のような大学の「永遠の静寂」の中で，「恍惚」状態で講義を受けるアーシュラであったが，次第に「神秘の源泉」のはずの大学に「幻滅」していく（398–99, 404–05）。大学のすべてが「嘘」，「いんちき」，「醜悪」に感じられ，大学は「純粋な学問の聖地」ではなく，「金儲けの準備をするための徒弟養成所」，「工場に隷属するちっぽけな実験場」，「最も俗悪で低劣な商業へと堕落した神殿」に思えてくる（403）。ここでは，アーシュラ自身が権威性を嘲笑う小鬼の役を引き受け，大学という制度の権威性と神聖性を，制度の内部からアイロニカルに批判する。

小鬼たちの嘲笑的批判精神が死滅し機械的全体性に完全に包摂された最悪の状態が，アーシュラの叔父トムが経営するウィギストンの炭鉱だ。炭層の開発に伴って一年ほどでつくられたこの町は，「醜悪」そのものであり，同じような建物が「無定形に，果てしなく，繰り返し続いている」（320）。「廃墟」あるいは「悪夢」のような光景は「均質的で無定形の不毛さ」に満ちており，「無秩序な赤煉瓦が皮膚病のようにみるみる広がる」様子は「醜悪で無定形の死の雰囲気の具現化」のようであり，「混沌の瞬間を永遠に留めた」かのようだ（320–21）。また，炭鉱労働者を含む町の住人たちは，まるで「亡霊」のようであり，「希望もないのに，死んだ殻の中で情熱をもちながら生き続ける生物」のようだ（320–21）。トムが言うには，住人たちは町のひどい環境を「当たり前のこと」として諦めており，炭鉱夫たちは自分が「仕事に売られた」存在であることを自覚し，「炭鉱こそが重要だ」と信じている（322–24）。トムにとっての「唯一の幸福な瞬間，純粋に自由な瞬間」は，「真の女王」である「機械に奉仕しているとき」であり，その瞬間にのみ，彼は「自己嫌悪」と「シニシズム」と「非現実感」から解放され，大いに活動できると言う（325）。アーシュラと一緒に町を訪ねた教師インガーも，「不純な抽象，物質のメカニズム」の崇拝者であり，「真の女王」である「機械」に奉仕するときにのみ，「人間的感情という足かせと堕落」から解放され，「極致，完璧な調和，不滅」へと至れると信じている（325）。アーシュラは，炭鉱町の状況を嘆きつつ受け入れるトムとインガーの話ぶりに，「食屍

鬼のような満足感」を感じとる（324）。彼女自身，「人間の肉体と生活が炭鉱という均整のとれた怪物の奴隷として服従させられている」状況に，一瞬「恐ろしい魅惑」を感じ，目が眩むが，必死に抵抗しようとする（324）。そして，たとえ炭鉱夫たちが失業状態になろうとも，「モロク（Moloch）」のごとき「機械」と「炭鉱」を破壊したいという衝動に駆られる（325）。

以上の例が示すように，テクストには，絶対的・権威的全体性とそれに対する嘲笑的批判精神とのせめぎ合いのテーマが，かたちを変えながら反復している。このようなテクストの構成を確認したうえで問うべきは，権威的全体性に対する批判意識が，本稿の考察対象である帝国主義というシステムにどの程度，どのように，向けられるのか，あるいは向けられないのか，という点だ。次節以降で，『虹』と帝国主義の関係を具体的に検討していこう。

3．個人，国家，帝国，生

テクスト中で政治的テーマが最も前景化する箇所であり，先行研究でもしばしば取り上げられるのが，アーシュラとスクレベンスキーによる，戦争と国家と個人の関係をめぐる議論だ。イギリス陸軍の工兵隊に所属するスクレベンスキーは，アフリカで戦争が勃発したら出征して「黒人のように働いて鉄道や橋を造るんだ」と言う（288）。「戦い」こそが「最も真剣な仕事」だと考える彼は，「マフディーを鎮圧するかどうかが重要だ」と主張する（288）。スクレベンスキーの考えを理解できないアーシュラは，「私たちにとってハルトゥームなんて関係ない」，「サハラ砂漠になんて住みたくない」と言い返す（288）。そして二人の議論は，国家と個人の関係へと展開する。「国家がなければ自分という存在はない」と言うスクレベンスキーと，国家がなくても「私が私であることに変わりはない」と言うアーシュラの意見は反発し合う（288）。アーシュラの怒りの矛先は軍人全体へと向けられ，兵隊を「木のようにこわばった（stiff and wooden）」（289）存在だと非難する。スクレベンスキーは，国家に属し，国家のために戦い，国家のために義務を果たすことの重要性を主張するが，そのような彼に対してアーシュラは，「あなたはまるで無のようだ（You seem like nothing to me）」（289）と言い返す。明らかにスクレベンスキーは，個としての批判精神をもたず，国家という巨大なシステムの一部として奉仕するだけの存在として設定されている。

二人の主張が完全に対立するこの議論で気になるのは，二人とも「国家」という語を繰り返す一方で，「帝国」という語を一度も用いない点だ（『虹』のテクスト中に，「帝国」という語は，酒場の名を除いて一度も現れない）。スクレベンスキーは「全体」こそが重要だと言うのだが，彼にとっての「全体」は「国家」を意味し（304-05），その枠を超えて「帝国」へと届くことはない。スクレベンスキーは，自分をとりまく帝国主義の状況の真の全体像を十分には理

解していないように思われる[3]――「世界の中の世界」にすぎない大聖堂を世界そのものと信じていたウィルのように。スクレベンスキーが実際に置かれている状況についての説明としては，彼自身の言葉よりも，帝国主義についてのアーレントによる次の言葉こそがふさわしい――「膨張のための膨張は無限のプロセスであり，その渦中に入った者は自分のままでありつづけることは決して許されない。この潮流に一旦身を任せた者は，このプロセスの法則に服従し，その運動を持続させるための名もなき軍勢の一員となり，自分自身を単なる歯車と見なし，その機能に徹することこそダイナミックな流れの方向の体現であり，人間の果たし得る最高の業績であると考えることしかできない」(171)[4]。スクレベンスキー自身は意識していなくとも，イギリス，アフリカ，インドという，この小説の登場人物の中で最大の行動範囲を与えられた彼の移動の経路自体が，帝国主義の「膨張のための膨張」の一端を示している。

真の全体への認識が不十分なため，二人の議論からは，アフリカの地での金およびダイヤモンド産業や植民地争奪戦といった帝国主義の歴史がごっそりと抜け落ちてしまうことになる[5]。二人のやりとりは，アフリカの他者が不在の議論だ。たしかにスクレベンスキーの発言中にマフディー戦争への言及はある。だが，そもそもなぜ戦争が起きなければならなかったのかという説明がないため，この出来事は，鎮圧し平定することが当然の混沌現象といった程度の意味しかもちえない。また，スクレベンスキーは「黒人」にも言及している。だがテクストは，鉄道と橋の建設に従事することになるスクレベンスキー自身に「黒人のように」と言わせることで，現地の他者を自己表象のための比喩の次元に収奪し，レトリックのレベルで先回りして他者の他者性と実在性を希薄化させてしまう。彼の発言の軽率さは，たとえばジョゼフ・コンラッド（Joseph Conrad）の『闇の奥』（*Heart of Darkness*）に登場する黒人労働者――重労働を課せられ，「病と飢餓」に苦しみ，「苦痛と自棄と絶望の姿態」で「じりじりと死を待っている」だけの「この世のものではない」ような存在(20)――と比較するだけでも十分に明らかだろう。一方，アーシュラも「ハルトゥーム」と「サハラ砂漠」という具体的な地に言及するのだが，「ハルトゥームなんて私たちには関係ない」，「サハラ砂漠になんて住みたくない」というふうに，無関心と拒絶の対象として言及するだけだ。アフリカの具体的な地は，いわば，テクストから排除されるためだけにその周縁部に一瞬だけ登場することを許されているにすぎない。これが，アフリカに対するこのテクストの「姿勢と言及の構造」（Said xxiii）だ。

二人の議論において，アーシュラはアフリカの地で「国家」のための戦争に奉仕するスクレベンスキーを批判し，テクストの語りもアーシュラに味方しているように見える。この点を根拠に，おそらく多くの読者は，たとえばマーク・キンキード＝ウィークス（Mark Kinkead-

3）倉持も，スクレベンスキーが自分の置かれた状況を十分に理解していない様子を指摘する（322, 329）。

4）アーレントのこの言葉は，サイードの『文化と帝国主義』のコンラッド論の中でも引用されている（24–25）。

5）アフリカでの戦争に関する具体的な情報については，岡倉を参照。『虹』とボーア戦争の関係についての分析例として，倉持と麻生の論考がある。

Weekes）のように，アーシュラの主張（そしてテクストの姿勢）を「反帝国主義」（138）と評価するだろう。だがこの結論はやや早計であると指摘したい。というのもテクストは，国家主義と帝国主義のイデオロギーの一員であるスクレベンスキーだけでなく，帝国主義の巨大な力に抵抗する者をも，決して肯定的には描いていないからだ。具体的には，アーシュラの祖父，ポール・レンスキーだ。ポーランドの医師であり愛国主義者であるレンスキーは，1863年にポーランドで起こったロシア帝国への蜂起を先導し，妻リディアと娘アナと一緒にロンドンへ亡命するが，やがて死ぬ[6]。（その後リディアはブラングェン家のトムと再婚する。）死んだ前夫を回想するリディアの言葉は，彼に対して批判的だ。ロシアに対する蜂起において，レンスキーは，「尊大」で「半ば熱狂的」で，蜂起のための「自分の任務と理念」のみを重視し，自分の子の死を悲しむ時間的余裕もなく，「命をすり減らした」（239）。ロンドンへ逃れたレンスキーは「壊れ」，「冷たく」，「こわばった（stiffened himself）」状態になり，死んだ（239）。リディアは，「決して自分の人生を生きることのなかった彼をほとんど許すことができなかった」（240）。

スクレベンスキーとレンスキーは，片や巨大な帝国システムの一員，片や帝国支配への反抗者という点で，対極の位置関係にあるはずなのだが，ある点において一致する。それは，帝国主義であれ，帝国主義に抵抗する愛国主義であれ，大きな理念あるいはシステムの一部として自身の義務を全うすることのみを人生の目的とし，自分自身の生を生きていないという点だ。スクレベンスキーを含めた英国兵とレンスキーにそれぞれ用いられる ‘stiff’ と ‘stiffened’ という語は，内発的な生命力を喪失し硬直した状態の表現として両者を結びつける。ここから言えることは，テクストの批判の対象は，帝国主義そのものではなく，特定のイデオロギーとシステムを盲信しそれに隷属するだけの個人の生き方にあるということだ。この見解は，この小説における ‘stiffened’ という語の使用法をさらに見ていくことで確かなものになる。ある場面では，文明社会の中で社会的自己を装って生きるすべての者が，「ほとんど木のようにこわばった（almost stiffened to wood）」存在として批判され（416），また別の箇所では，重労働のために「こわばった（stiffened）」身体となった炭鉱労働者たちが，「棺桶」の中で「生き埋め」のような状態で過ごす様子が描かれる（458）。

上に挙げた例に加えて，『虹』以外の作品から興味深い例を一つだけ紹介したい。それは『息子と恋人』（*Sons and Lovers*, 1913）に登場するミリアムだ。教職に就いて自立したはずのミリアムを，テクストは，「ほとんど木のようなこわばり（A sort of stiffness, almost of woodenness）」（460）と，『虹』とほとんど同じ語彙を用いて描写する。ミリアムの否定的な描写は，上に示した見解に従えば，ミリアムもまた，教育システムの機械的な歯車の一部と化し，自分自身の人生を生きていないことを暗示している。ミリアムの描写に用いられる ‘stiffness’ は，小説の主人公ポールがかつてミリアムに自分の絵画を見せながら熱く語った芸術論の中に登場する語だ。

6）この設定からもわかるように，アーシュラにはポーランド人の血が流れている。この小説における異国性のテーマについては，有為楠による論考を参照。

ポールは語る—— ‘It’s because — it’s because there is scarcely any shadow in it — it’s more shimmery—as if I’d painted the shimmering protoplasm in the leaves and everywhere, and not the stiffness of the shape. That seems dead to me. Only this shimmeriness is the real living. The shape is a dead crust. The shimmer is inside, really’（183）. テクストは，この短い引用中に，「揺らめき」を表す語それ自体に揺らめきを加えながら四度も書き込み（‘shimmery’, ‘shimmering’, ‘shimmeriness’, ‘shimmer’），「揺らめき」に満ちた生の「原形質（protoplasm）」と「外形」の「こわばり（stiffness）」を対比させる。ポールの芸術論も踏まえてロレンスのテクストの趣旨を要約すれば，スクレベンスキーにせよ，レンスキーにせよ，炭鉱夫にせよ，ミリアムにせよ，文明社会に生きるほぼすべての者が，政治的思想とは全く無関係に，生の「揺らめき」に満ちた「原形質」——『虹』においてこれに相当する語が，「本質的生（intrinsic life）」（304）だ——を失って硬直化した存在となってしまったという理由で批判の対象となるのである。

アーシュラとスクレベンスキーによる政治的議論に注目してテクストにおける帝国主義のテーマについて考察を進めたはずが，生の「原形質」の欠如という，きわめて非政治的で神秘的な，そしていかにもロレンス的な結論に至ることになった。議論の軌道を政治的な方向へ修正するためには，考察の対象を他に移す必要がありそうだ。おそらくこの小説において，帝国主義のダイナミズムを，間接的にではあるが——あるいはむしろ間接的であるがゆえに——重要なかたちで体現しているのは，軍の一員として世界の複数の地を移動する工兵スクレベンスキーよりも，イギリスの地方で生活するアーシュラという人物（フィギュア）＝形象であると思われる。

4.「広がりゆく輪」，膨張する帝国（2）

帝国主義とは何ら関係のないように見えるアーシュラにその兆候を読み取ること。それは具体的にはどういうことか。たとえばテクストは，三代にわたるブラングウェン家の者たちの中で最も強い探求心と向上心を抱き，つねに遥か遠くの未知の世界を求めるアーシュラのために，「広がりゆく輪」というタイトルの章を二つも設定し（第10章，第14章），「男の世界」（第13章のタイトル）へと彼女を進出させ，そしてそんな彼女を「地上の旅人」（387）と呼ぶ。キャラクター設定のレベルで解釈すれば，この呼称は，自己実現を目指して移動し続けるアーシュラの人物像にふさわしいと言えるだろう。だがここで必要なのは，次のような問いかけだ。テクストがアーシュラを「地上の旅人」と呼ぶとき，「地上」の移動に関するどのような条件がその呼称を可能にしているのか。この時代の「地上」を具体的に復元すれば，サイードが簡潔に説明する次のような状況が立ち現れるはずだ。

> Consider that in 1800 Western powers claimed 55 percent but actually held approximately 35 percent of the earth’s surface, and that by 1878 the proportion was 67 percent, a rate of

increase of 83,000 square miles per year. By 1914, the annual rate had risen to an astonishing 240,000 square miles, and Europe held a grand total of roughly 85 percent of the earth as colonies, protectorates, dependencies, dominions, and commonwealths.（8）

これが，アーシュラに「旅人」としての移動を可能にしている「地上」の実際の姿である。イギリスの一地方に住むアーシュラと西洋列強の海外領土の拡張を結びつけるのはやや唐突かもしれない。だがテクストは，アーシュラの想像力の中に，前節で言及されたハルトゥームとサハラ砂漠，さらに本節で考察するインドを含めた世界規模の地図が確実に広がっていることを示している。さらにテクストは，アーシュラが遠隔の帝国領土へ移動する展開も十分にありえたことをも示唆する。具体的には，スクレベンスキーとの子を妊娠したことに気づいたアーシュラが，すでにインドに赴任したスクレベンスキーを追いかけ，夫に従順なよき妻として平穏に生きることを選ぼうとする瞬間だ。自己実現のための「旅」を断念し，伝統的な妻のポジションに安住することが，遠隔の帝国領土への移動を意味するという現象が暗に示すのは，アーシュラにとって海外の植民地は決して遥か遠くの世界ではないということだ。インドについてアーシュラはこう想像する―― ‘India tempted her—the strange, strange land. But with the thought of Calcutta, or Bombay, or of Simla, and of the European population, India was no more attractive to her than Nottingham’（439）. アーシュラが想像するインドは，その地に在住の「ヨーロッパ人」を中心にイメージされており，ブースが指摘するように，それは，「「他者性」を無視すること」によって成り立っている（‘Lawrence’ 202）[7]。そしてそれは，容易にノッティンガムと並置可能な身近な存在となる。

このころのイギリスによるインド支配の状況を具体的に復元するならば，「インドでは，1930年までに「たった4,000人のイギリス人官僚が，6万の軍人と9万の民間人（その大部分が実業家と聖職者であった）に助けられつつ，人口3億の国に身を置いていたのである」」（Said 11）[8]。アーシュラのインド観からは，その地に在住するイギリス人を圧倒的に上回る数のインド人の存在がごっそりと抜け落ちている。これは，アーシュラ個人の限界としてではなく，帝国主義システムとの関係において理解する必要がある。具体的には，アーシュラのインド観は，アーレントの言う「新しい帝国主義的行政装置の特色である無関心と隔絶」の産物と考えられる。それは，「本質的には暴政的恣意よりもっと非人間的な統治形式であることが明らかとなった。なぜなら，それは絶対的な完全無欠さで遂行されたとき，支配される側の人間をいわば決定的に純然たる管理対象にまで貶（おとし）めてしまうからである。完全無欠と結合した無関心と隔絶は，統治者と被統治者の利害の絶対的分離を結果し，両者が衝突することすらなくしてしまった」

7）ただし，アーシュラがスクレベンスキーからの求婚とインド行きを断ることを理由に，彼女の立場を「反植民地主義的」（‘Lawrence’ 202）と呼ぶブースの見解は，単純すぎると思われる。

8）サイードの著書の中で引用されているのは，Tony Smith, *The Pattern of Imperialism: The United States, Great Britain, and the Late Industrializing World since 1815*（Cambridge UP, 1981）。

(166)。この制度的な「無関心と隔絶」の帰結が，イギリス国内に住むアーシュラの想像力における，遠隔の植民地の他者に対する心理的な「無関心と隔絶」だ。

「無関心」は，『虹』に繰り返し登場するテーマである。三代にわたるブラングウェン家の人々の多くは，一度は外部世界に関心を抱きつつ，最終的にそれを放棄し無関心になる。それとは対照的に，アーシュラは自身の関心と意識の射程を積極的に拡大していくのだが，どうやらアーシュラの「広がりゆく輪」の想像力は，遠隔の帝国領土にまで拡大することはあっても，その地で統治される他者の存在にまで届くことはないようだ（前節で確認したハルトゥームとサハラ砂漠の扱いと同様に)。このように，アーシュラの想像力の中の世界イメージは，地理的に広い範囲をカバーしつつ，そこから他者がこぼれ落ちることを特徴とする。ブースは，「アーシュラは個人としての自分の存在がグローバルな規模の帝国システムのもとに成立していることを強く意識している」と述べるが（'*The Rainbow*' 50)，この見解はアーシュラを過大評価しすぎている。むしろ，イギリス国内の日常を生きる者がどれほど「個人的体験」を「拡大」しようとも，「植民地の生活，苦しみ，搾取といった根本的な他者性」を包含することはできない（*The Modernist* 157)，というジェイムソンの論こそが，アーシュラの説明として適切である。

アーシュラの「広がりゆく輪」は，いわば，他者が不在の利己的な自己膨張と言える。その自己膨張が異常なまでに過激化するのが，第11章だ。夜の闇の中，スクレベンスキーと一緒に過ごすアーシュラは，「地球の限界」から飛び出して，夜空の星々のもとへ飛んでいき，星々と共にいたいと望む（295)。さらに「巨大な白い月」が現れると，地上の物事を「引き裂き」，「清浄で自由な月のもとへ飛んでいきたい」と望む（296–97)。そしてアーシュラの自己膨張が究極のレベルに達する瞬間が，第15章だ。星が輝くある晩，アーシュラとスクレベンスキーは，サセックスの丘陵の頂上で，裸になって抱き合う。だがそのとき，アーシュラは夜空の星を見ており，「まるで星々こそが同衾者（どうきんしゃ）であり，底知れぬ子宮の闇に入り込み，ついに底まで探り当てたかのような」感覚を抱き，「相手はスクレベンスキーではない」と感じる（431)。アーシュラは，自分でもわからない「未知なるものへの憧憬」が湧き上がるのを感じる（443)。海岸を歩く彼女は，「海の激烈な情熱と陸への無関心」に「激しい欲望充足への衝動」を刺激され，気が狂いそうになる（443)。その充足を「擬人化」（443）した存在がスクレベンスキーのはずなのだが，彼ではアーシュラの激しい渇望を満たすことはできない。ある晩，星がかすかに輝く夜空の下，海岸砂丘を歩くアーシュラとスクレベンスキーを，恐ろしいほどに強烈な月光が照らす。アーシュラは月光の中に飛び込み，自分の身体を月と海の波に曝け出し，「ハルピュイア（harpy)」のような金切り声で，三度も「行きたい（I want to go)」と叫ぶ（444)。どこへ行きたいのかとスクレベンスキーに問われても，「わからない」と答えるのみだ（444)。アーシュラは，まるで「獲物」を捕らえるかのように，おそろしい「破壊力」でスクレベンスキーをつかみ，彼の「心臓」をも食らい尽くすかのように，「ハルピュイアの嘴（くちばし）のような激しい接吻（the fierce, beaked, harpy's kiss)」をする（444)。スクレベンスキーは性の試練に耐えきれず，死の

恐怖を味わう。そして彼は，「永劫に動かぬかのごとき顔に，とめどなく涙を滴らせながら，月光を浴びて横たわる恐ろしい塑像」のようなアーシュラから逃げる（445）。

この場面は，自然との交感といったありきたりな解釈には収まりきらない不気味さに満ちている。まずスクレベンスキーという「擬人化」された有限の形象では満足できず，「地球の限界」にすら我慢できず，星と月との交感を求めて拡大するアーシュラの渇望は，植民地主義的政治観に潜む「狂気」と「膨張にとっては地球の大きさの有限性が障害でしかないという［……］帝国主義の運動原理」（6）を表す言葉としてアーレントが引用した，セシル・ローズの「膨張こそすべてだ」「できることなら私は星々を併合しようものを」（5）という発言と全く同じベクトルを向いている。そしてアーシュラが繰り返し叫ぶ，「行きたい」という，具体的な目的地が不明・不在の言葉は，アーシュラ自身，自己拡大の欲動が何を目的としたものであるのか，どこへ向かおうとしているのか，どう処理すればよいのか，わからずにいる様子を伝えている。その様子はまるで，膨張すること自体が目的と化した帝国主義のダイナミズム――「膨張のための膨張」の「無限のプロセス」（アーレント171）――を彼女が個人のレベルで内面化したかのような現象だ。さらには，相手を食らい尽くし，自分自身をも破壊し尽くすほどに増大するアーシュラの貪欲さは，もはや彼女を人間の形象に留めておくことができず，彼女を女面鳥身の醜い怪物「ハルピュイア」へと変身させる。奇しくもこの怪物は，J・A・ホブソン（J. A. Hobson）の『帝国主義論』（*Imperialism: A Study*）の中に，私利私欲を追い求める帝国主義資本家たちの比喩として登場する存在だ（58）[9]。「ハルピュイア」は，性と帝国主義の次元をたやすく越境しながら徘徊し，両者の間に，修辞レベルにおいて予期せぬ繋がりを築く。こうして見てくると，本人をも圧倒するほどのアーシュラの自己拡大的衝迫は，彼女自身の内奥から湧き上がる現象というよりも，この時代特有の帝国主義的ダイナミズムの蠢きの変奏としての性質を強く有している様子が浮かび上がってくる。ロレンスの有名な手紙の表現を借りて言い直せば，アーシュラという個人の自己拡大の野心と帝国主義の膨張の運動は，たとえ表面的には全くの別物であるとしても，「炭素」（*Letters* 2: 183）のレベルでは識別困難なほどに重なり合うのである[10]。

ただし，アーシュラは帝国主義的ダイナミズムを受動的に体現するだけでなく，世界規模の巨大な破壊的な力に必死に抗おうとすることも忘れてはならない。ボーア戦争の勃発によって「宇宙」の「全体」が崩れ落ちるかのような衝撃を受けたアーシュラは，たとえ「塵」のごとき「無力」な存在であっても，自分の「小さな両手」だけを武器にして，「全世界」を相手に「闘

9）ちなみにロレンスは，J・A・ホブソンの息子のハロルド（Harold）と友人関係にあった。

10）1914年6月5日付けのエドワード・ガーネット（Edward Garnett）宛の書簡に，ロレンスは『虹』のもとになる作品の原稿について記す中で，次のような新たな小説論を提示している―― ‘You mustn’t look in my novel for the old stable ego of the character. There is another ego, according to whose action the individual is unrecognisable, and passes through, as it were, allotropic states which it needs a deeper sense than any we’ve been used to exercise, to discover are states of the same single radically-unchanged element. (Like as diamond and coal are the same pure single element of carbon. The ordinary novel would trace the history of the diamond—but I say “diamond, what! This is carbon.” And my diamond might be coal or soot, and my theme is carbon)’（*Letters* 2: 183）. この「炭素」の手紙をめぐるさまざまな解釈については，吉村の論考に簡潔にまとめられている。

い」を挑むことを決意し（303–04），「男の世界」で奮闘する。アーシュラは，社会での自身の奮闘を語る際に，しばしば「世界」という語を使う。だが彼女が「世界」と呼ぶものが，実際にはイギリスの一地方というきわめて限定的な範囲——いわば「世界の中の世界」——であることは明白だ。アーシュラは，「世界の中の世界」にすぎない地方の日常生活を「世界」と呼び，個人的な闘いを続けることで，帝国主義システムによって形成された「世界」，そして遠隔の地での戦争によって崩壊しつつある「世界」の認識不可能な全体性を，日常レベルに「翻訳」して捉えようとする[11)]。

同時に，「世界」をアーシュラという一個人の「世界の中の世界」に包摂することは，帝国主義的現実の真の姿を物語世界から締め出すテクスト戦略としても機能することになる。実際にテクストは，南アフリカでの戦争を伝える新聞記事によって遠隔の地の現実を知る機会を得るにもかかわらず，精神の安定と自身の幻想を保つために「できるだけ新聞を読まないように」（331）するアーシュラの行為を通して，テクスト内に帝国主義の現実が侵入するのを巧みに阻止し，物語の安定を維持する[12)]。本稿の第2節で確認したように，この小説は全体性の幻想を異化する鋭い批判的意識を有している。だがテクストは，「世界」を包摂すると同時に排除するアーシュラの「広がりゆく輪＝世界の中の世界」を「世界」そのものと同一視することについては，最後まで無批判でいる。この点に，この小説の戦略性とイデオロギー性の決定的に重要な要素が潜んでいる（その効果は，次の最終節で考察する小説のエンディングで最も強力に発揮されることになる）[13)]。イングランドの地方の日常を生きる平凡な女性，帝国主義的膨張と不気味に共振する自己拡大的衝迫の持ち主，「世界」に闘いを挑む反抗者，「世界」の現実から目を背ける逃避者，「広がりゆく輪」に「世界」を包摂しつつ排除する視点提供者——帝国主義の文脈で『虹』を考察するうえでアーシュラが特権的存在である最大の理由は，この人物（フィギュア）＝形象が，帝国主義との共振性とそれへの批判性，帝国主義的全体性の認識に関する可能性・不可能性・無関心・拒絶のすべてが同時に作動するきわめて強力かつアンビヴァレントな結節点であるからだ。

5．虹の向こう側の「世界」

ここまでのテクスト内部の分析を踏まえたうえで，最終節では，小説をとりまく当時の帝国

11）日常生活とは別の超越的次元のヴィジョン（たとえばキリスト教の世界）を日常的な語彙に「翻訳」（264）して理解しようとする行為は，アーシュラの少女時代から見られる特徴である。

12）アフリカは，非政治化・抽象化・神秘化され，「闇」（413）としてテクストに取り込まれる。

13）ここでの議論は，ジェイムソンによる『ハワーズ・エンド』論を念頭に置いている。ジェイムソンは，『ハワーズ・エンド』の日常風景の描写に突如現れる「無限」という超越的概念が，帝国の表象不可能な全体性の「表徴」・「代用」として機能する様子を指摘する（Jameson, *The Modernist* 158–63）。『虹』にも「無限」という語が複数回現れるが，この小説において『ハワーズ・エンド』の「無限」と非常に近い働きをしているのは，アーシュラの日常生活の描写に頻繁に用いられる「世界」という語であると思われる。

主義的状況のある程度外部に立つことのできる現代の読者の手で，物語世界を積極的に外部世界へと開き，小説と帝国主義の関係について巨視的に考察したい。まずは，「全世界」に闘いを挑むアーシュラの批判精神を，彼女を閉じ込める「世界の中の世界」から解き放ち，真の意味での「世界」へと開いていくとき，それがどの程度帝国主義批判へと接近しうるのかを検証しよう。たとえば我々は本稿の第2節で，アーシュラがウィギストンの醜悪な炭鉱システムを「モロク」（325）に喩える様子を確認した。当時の時代風景を広く見渡せる我々は，アーシュラとほぼ同じ時代に，ホブソンもまた自著の中で帝国主義を「モロク」の崇拝に重ねたことを知ることができる。

> Imperialism—whether it consists in a further policy of expansion or in the rigorous maintenance of all those vast tropical lands which have been ear-marked as British spheres of influence—implies militarism now and ruinous wars in the future. This truth is now for the first time brought sharply and nakedly before the mind of the nation. The kingdoms of the earth are to be ours on condition that we fall down and worship Moloch.（130）

人間の身体と命を犠牲にして肥大化するウィギストンの炭鉱システムと帝国主義が，人身御供を要求する残忍な神「モロク」の形象によってリンクする。アーシュラ自身はおそらく気づいていないが，そしてテクストのプロットのレベルに記述はないが，炭鉱から産出される良質の石炭は，戦争を含めた帝国の発展のための重要な動力源であり，その意味で，アーシュラが日常生活で見る炭鉱と，彼女の認識枠を遥かに超えた帝国主義は，歴史のレベルにおいて直結していたのである[14)]。

もう一例を挙げれば，本稿の第2節で見たように，アーシュラは，大学という場が「純粋な学問の聖地」ではなく，「金儲けの準備をするための徒弟養成所」，「工場に隷属するちっぽけな実験場」，「最も俗悪で低劣な商業へと堕落した神殿」であることを見抜いた（403）。我々は，やはりホブソンが，アーシュラとほとんど同じ批判精神で，帝国主義の美辞麗句に覆われた商業主義的性格について次のように述べたことを知ることができる。

> They [financiers] are essentially parasites upon patriotism, and they adapt themselves to its protecting colours. In the mouth of their representatives are noble phrases, expressive of their desire to extend the area of civilisation, to establish good government, promote Christianity, extirpate slavery, and elevate the lower races. Some of the business men who hold such language may entertain a genuine, though usually a vague, desire to accomplish these ends,

14)『虹』における炭鉱，戦争，帝国の密接な関係に関する考察については，麻生45–46を参照。

> but they are primarily engaged in business, and they are not unaware of the utility of the more unselfish forces in furthering their ends. Their true attitude of mind was expressed by Mr. Rhodes in his famous description of 'Her Majesty's Flag' as 'the greatest commercial asset in the world.' (61)

『虹』とホブソンのテクストを並べると，金儲けの訓練機関としての大学と，そこで習得したスキルを実践する場としての帝国主義システムが，一本のラインで繋がることになる。このように，アーシュラの日常レベルの批判精神は，ホブソンによる帝国主義論へと直結する潜在的可能性に満ちている。だがその可能性がテクスト内で実現することはない。その最大の理由は，アーシュラの「広がりゆく輪」が，結局のところ，彼女を「世界の中の世界」としての日常生活の領域に閉じ込め，真の歴史的状況から隔離するためのスクリーンとして機能しており，アーシュラがそれを「世界」そのものと認識して満足してしまうためだ。その潜在的可能性を最大限に引き出すには，「広がりゆく輪」を当時の「世界」へと大胆に開くための知を備えた現代の読者の参加が必要になる。

次に，この小説世界を，ロレンス自身の「世界」体験と関連づけながら，別の方法で外部に開いてみよう。ロレンスは，第一次世界大戦終結後，イギリスを脱出し，「地上の旅人」として帝国領土内外の「世界」を移動した。アーシュラはインドへの移動の選択を放棄したが，ロレンス自身はアジアへと渡った。1922年3月，ロレンスと妻フリーダは，インドの南側に位置する英領セイロン（現スリランカ）に到着する。二人の滞在中に，ペラヘラ祭と呼ばれる盛大な祭りが催される。ロレンスは，現地から知人に宛てた複数の手紙でその様子を伝えている。松明，象，悪魔の舞踊による盛大なパレードの様子を記述する一方で，祭りに参加したプリンス・オヴ・ウェールズの「やせ細り」「ビクビクして」「落ち着きがなく」「疲れ切った」様子，そして権威的存在であるがゆえに現地人と白人の両方から密かな憎悪の的になる様子が，詳細に記される（*Letters* 4: 215–16, 218）。そしてある手紙では，「この国の黒い肌の人々は皆，我々を嘲笑してやろうという確固たる願望をもっています。我々の背後で嘲っているのです」（*Letters* 4: 225）と，プリンス・オヴ・ウェールズとセイロン人との関係を，「我々」という白人全体の問題へと拡大する。ロレンスはこの体験をもとに「象」（'Elephant', 1923）という詩を創作する。この詩に登場するプリンス・オヴ・ウェールズもやはり，「青白く」，「元気がなく」，「不安な」様子で，彼を見上げる大勢のセイロン人たちの顔には，「冷たく，反抗的で，嘲笑する悪魔」が顕現する（388–91）[15]。

手紙と詩に登場する，帝国の権威に対して「嘲笑」的な表情を浮かべる「悪魔」のごときセイロン人と，『虹』における大聖堂の絶対的全体性を嘲笑う小鬼との類似性は明らかだ。「悪魔」

15）植民地の人々が支配者に向ける嘲笑と憎悪に対する過剰なまでの自意識は，ジョージ・オーウェルの（George Orwell）の「象を撃つ」（'Shooting an Elephant'）にも描かれている。

のごときセイロン人は，大聖堂の小鬼たちが，嘲笑の対象を大聖堂から帝国へとシフトし，舞台をイングランドの地方から植民地に移し，再登場した姿として位置づけることができる。では「嘲笑」と「反抗」の精神に満ちたセイロンの「悪魔」たちは，帝国主義の権威を激しく揺るがすほどの力を発揮できるのかというと，そうはならない。逆に「象」は，詩の最後に語り手によるある政治的幻想を配置することで，抵抗の可能性をすべて抑え込む。その幻想の中では，語り手自身がプリンス・オヴ・ウェールズに代わって統治者として君臨し，「我仕える（*Ich dien*）」というプリンス・オヴ・ウェールズのモットーに代えて，「我に仕えよ（*Dient Ihr*）」と宣言し，植民地人を統治するのである（391–92）。『虹』のリンカン大聖堂のゴシック建築の原理――「嘲笑」する小鬼たちが大聖堂の「一元論」に反駁し，「多様性」と「多元論」を主張すると同時に，それらの要素すべてを「不動の建築物のような絶対的な」全体性に包摂するという原理――が，ここでは帝国の原理として変奏しつつ反復している。

当時の手紙でロレンスは次のように記している。

> But India will fall into chaos once the British let go. The religions are so antagonistic—Hindu and Mahommedan—and then Buddha. They may keep Britain in power, out of fear of each other. Then again, they may not. But all this ‘nationalism’ and ‘self-government’ and ‘liberty’ are all tripe. They’ve no more notion of liberty than a jackal has. It’s an absolute farce. The whole thing is, like Bolshevism, anarchistic in its inspiration—only anarchistic: just a downthrow of rule, and a chaos.（*Letters* 4: 246）

このときのロレンスにとって，インドはイギリスによる「統治」下においてのみ「秩序の崩壊と混沌」に陥ることなく存在できる地域であり，ロレンスの想像力がそれ以外（以後）のインドの姿を想い描くことはなかった。このときのロレンスの帝国観をあえて要約するならば，リンカン大聖堂の絶対性と永遠性へのウィルの盲信についての次の表現をほぼそのまま当てはめることができるだろう―― ‘a world […] within a chaos: a reality, an order, an absolute, within a meaningless confusion’（190–91）.

ロレンスによるアジアの植民地体験から遡及的に『虹』を再読するとき，何が言えるだろうか。本稿の第 2 節で見たように，『虹』において，ゴシック建築が内包する多元論と権威的一元論との間のせめぎ合いは，イギリス国内の教育機関や炭鉱の表象において反復される。だがそのモチーフが帝国主義へと直結する様子を確認することは難しい。あえてその可能性を探れば，「マフディーを鎮圧するかどうかが重要だ」（288）というスクレベンスキーの発言や，インドに赴任する彼が現地の「無力な大衆」を「権威」と「責任」と共に治める姿についての想像図（411）に，ゴシックの原理とのかすかな繋がりを見出せるかもしれない。だがテクストは，マフディー教徒にもインド人にも，大聖堂の小鬼たちに見られるような，権威に対するアイロニ

カルで嘲笑的な精神に満ちたエージェンシーを付与することはない。『虹』を帝国主義の観点から読むとき，おそらくこの点が，この小説の想像力の一つの限界点として定められることになると思われる。植民地人が帝国への批判的・嘲笑的精神に満ちた邪鬼的存在と化し，ゴシックの原理が帝国の原理へと展開するには，やはり，ロレンス自身が「地上の旅人」として実際に植民地を体験するまで待つ必要があると言えるだろう。

以上の議論を踏まえたうえで，本稿が最後に取り組むことになる対象は，エンディングに現れる虹だ。小説を締めくくるこのきわめて神秘的で象徴的な虹を，帝国主義の観点からラディカルに再考することが，本稿の議論の最後の，そして最大の課題となる。小説は，「世界」との闘いで憔悴しきったアーシュラが，部屋の窓から見る次の風景によって締めくくられる。

> And the rainbow stood on the earth. She knew that the sordid people who crept hard-scaled and separate on the face of the world's corruption were living still, that the rainbow was arched in their blood and would quiver to life in their spirit, that they would cast off their horny covering of disintegration, that new, clean, naked bodies would issue to a new germination, to a new growth, rising to the light and the wind and the clean rain of heaven. She saw in the rainbow the earth's new architecture, the old, brittle corruption of houses and factories swept away, the world built up in a living fabric of Truth, fitting to the over-arching heaven. (458–59)

本稿のねらいは，すでに先行研究によって山積み状態の虹の解釈にさらに新たな解釈を追加することではない。そうではなく，この虹を「世界」へと開き，この非政治的で神秘的な象徴を，あえて帝国主義という政治的なテーマと突き合わせ，脱神秘化する可能性を探ってみたい。この課題に取りかかるための準備作業として，まずは上の場面の特徴を精査しよう。

まず注目したいのは，アーシュラが部屋の窓から風景を眺める様子だ。この設定は，『虹』執筆当時にロレンスがE・M・フォースター（E. M. Forster）に宛てたある手紙の一節を想起させる—— 'It is time for us now to look all round, round the whole ring of the horizon — not just out of a room with a view; it is time to gather again a conception of the Whole' (*Letters* 2: 265–66). ロレンスは，「眺めのいい部屋」から外を見るのではなく，「地平線の全体」を見晴らし，「全体」という観念を取り戻すことが重要だと手紙に記す一方で，自身の小説を，主人公アーシュラが部屋の窓から眺める風景で締めくくる。窓から見える風景は，本来は醜悪さに満ちたものであるが，テクストは，アーシュラの強力な主観的想像力によってそれを希望に満ちた美しい眺めへと変容させる。ここで注視すべきは，地上に虹を見るアーシュラが，同時に，「朽ち腐れた地上を這いまわる者たち」の「血」の中にも「虹」がかかり「生に満ち震え」る様子を見ている点だ。つまりアーシュラはこのとき，複数の虹を見ている。「地上を這いまわる者たち」は，引

用箇所の直前に言及される炭鉱夫を含む労働者たちを指している。現実レベルで考えれば，労働者たちの「血」にかかる「虹」は，非人間的で機械的な労働システムへの抵抗の萌芽として解釈することが可能だろう。だが対象から徹底的に距離をおいたアーシュラの視点は，労働といった生々しい現実を不可視化し，労働者たちの血の中に存在する抵抗の萌芽となりうる「虹＝生」を審美レベルへとずらすことで非政治化し，本来はばらばらの存在を「地上の新たな建築物」としての単一の虹を構成する諸要素として包摂し，窓枠＝額縁に収められた一枚の美しい風景画を完成させる。さらにテクストは，イギリスの一地方の風景を「生きた「真理」によって構築された世界」と呼ぶことで全体化する。これが，テクストが最終的に提示する「世界＝全体」である。それは，ロレンス版「眺めのいい部屋」の内部で想像的に構築された，現実レベルの矛盾がすべて解消された，あまりにも美しく調和的で統一的な――そしてテクストがアーシュラにのみ繰り返し用いる語を借りれば，「ロマンティックな」――「世界＝全体」だ。

さて，さきほど述べたように，本論は，物語中最大の権威性と審美性を付与された「虹＝建築物＝世界＝全体」を，より大きな枠へと開きつつ脱神秘化し相対化することを試みる。この困難な試みを遂行するためには，この巨大な「建築物」にかなりの強度の衝撃を加える必要がある。そこで，あえてこの場面とは全く無関係に見えるロレンスのテクストと突き合わせ，大胆な比較検証作業を行ってみたい。その比較対象となるのは，「地上の旅人」としてアジアを通過しアメリカ大陸へ渡ったロレンスが，1924年にニューメキシコ州のロッキー山脈のふもとで記したある手紙だ。

> Myself, I am sick of the farce of cosmic unity, or world unison. […] And the great racial differences are insuperable. […] The spirit of place ultimately always triumphs.
>
> To tell the truth, I am sick to death of the Jewish monotheistic string. It has become monomaniac. I prefer the pagan many gods, and the animistic vision. Here on this ranch at the foot of the Rockies, looking west over the desert, one just *knows* that all our Pale-face and Hebraic monotheistic insistence is a dead letter […]. And I have known many things, that may never be unified: Ceylon, the Buddha temples, Australian bush, Mexico and Teotihuacan, Sicily, London, New York, Paris, Munich—don't talk to me of unison. No more unison among man than among the wild animals […]. As for 'willing' the world into shape—better chaos a thousand times than any 'perfect' world. […]
>
> To me, chaos doesn't matter so much as abstract, which is mechanical, order. To me, it is life to feel the white ideas and the 'oneness' crumbling into a thousand pieces, and all sorts of wonder coming through. […] I hate 'oneness', its [sic] a mania. (*Letters* 5: 67)[16]

16）拙論「『セント・モア』の植民地幻想」では，本節の考察対象として取り上げたロレンスのアジア体験とアメリカ体験を分析しながら，『セント・モア』における帝国の欲望と不安について論じている。

「眺めのいい部屋」から「世界」を見るアーシュラとは異なり，実際に帝国領土内外の「世界」の複数の地を旅したロレンスは，「普遍的統一性や世界的調和」を否定し，「我々の青白い顔をしたヘブライの一神教の教え」の死を宣告する。リンカン大聖堂が象徴する一元論が，ここでは世界規模に拡大されて否定される。また，ロレンスがセイロンで目撃したプリンス・オヴ・ウェールズの「青白い顔」が，ここでは西洋の一神教の特徴として拡大される。一元論的価値観を否定するロレンスは，代わりに「地霊」の勝利を宣言し，「多神教の神々」を崇拝する。大聖堂の「薄暗がりの中から絶対的なものの虚偽を嘲笑い，多様性，多元論を宣言して」（‘Study’ 454）いた小鬼たち，その変身した姿としての植民地のセイロン人たちは，ここでは「地霊」，「多神教の神々」へと姿を変え，自らの存在を堂々と主張する。さらにロレンスは，「世界を「意志の力」でかたちづくる」行為を否定し，「抽象的で機械的な秩序」と「白人がつくりあげた観念と「統一性」」よりも「混沌」を称賛する。ここでロレンスが言う「意志の力」でつくられた「「完璧な」世界」，「白人がつくりあげた観念と「統一性」」に，イギリスの帝国主義が含まれないはずはないだろう。「抽象的で機械的な秩序」は，『虹』の中でも，軍隊，炭鉱，教育機関を例に描かれていたが，上の手紙では，それは「白人」文明全体へと普遍化される。

そしてロレンスは，それがすべて崩壊し「あらゆる種類の驚異が発現」する様子を「生」と呼ぶ。この記述は，『虹』のエンディングで，「朽ち腐れた地上を這いまわる者たち」一人一人の「血」の中に「虹」がかかり「生に満ち震え」る様子と酷似している。ただし『虹』と決定的に異なるのは，小説では個々人の「血」の中の「虹＝生」が最終的に単一の「虹＝建築物」へと包摂・統一されるのに対して，1924年のロレンスは，もはや「あらゆる種類の驚異＝生」を「普遍的統一性」へとまとめる必要性を感じていない点だ。むしろ全く逆に，「白人」が「意志の力」で構築した統一的「世界」と「観念」が「粉々に砕け散り」，「混沌」状態へ陥ることを賞賛する。同時期，『インドへの道』（*A Passage to India*）読了後にフォースターへ宛てた手紙でのロレンスの発言は決定的に重要だ――‘The day of our white dominance is over, and no new day can come till this of ours has passed into night. Soit！ I accept it’（*Letters* 5: 77）.『虹』のアーシュラのヴィジョンでは，イギリスの一地方に広がる「古くて脆い腐敗堕落の家々や工場」が「すべて押し流され」た。1924年のロレンスのヴィジョンでは，「白人による支配の時代」が押し流される。そしてそこから現れるはずの「驚異＝生」に満ちた「新たな時代」は，もはや唯一の「真理」に基づく単一の虹には包摂・統一できないほどに多様性に満ちたものとなる。一元論の敗北と多元論の勝利の瞬間だ。

『虹』のエンディングは，強力な審美化と包摂の戦略[17]によって，虹の象徴性に読者の注意を惹きつける。そのため，この最終場面そのものに帝国主義との関係を読み取ることはきわめて難しい。だが我々は，イギリスの一地方に顕現する虹が象徴する「世界」――それは結局のとこ

17）審美化と包摂の戦略については，Jameson, *The Political Unconscious* を参照。

ろ「世界の中の世界」である――そのものに解釈の照準を合わせるのではなく，読みの視点を固定し制限する「眺めのいい部屋」の外へ飛び出し，この虹――そして『虹』――の向こう側に果てしなく広がる，帝国領土を含めた「世界」へと可能な限り視界を拡大することで，我々の読みの「広がりゆく輪」の中でこの虹を脱神秘化し，脱中心化し，その相対的位置づけを明らかにすることができる。そのとき，おそらく『虹』執筆当時のロレンス本人ですら想像することができなかったはずの次の事実が浮かび上がってくることになる。この小説を安定した「統一性」と「調和」の感覚によって締めくくる，「真理」を基盤とした「地上の新たな建築物」は，後に，「地上の旅人」として帝国領土内外の「世界」を体験し，「人種間の大きな差異」を痛感し，「意志の力」による「普遍的統一性」という考えの愚かさと「白人」文明の時代の限界を認め，「あらゆる種類の驚異」の発現としての「生」を称揚するロレンス自身によって，「粉々に砕け散」ることが望まれることになる「建築物＝世界」であることを。

参考文献

＊訳出にあたって準拠した翻訳書がある場合はその旨併記する。一部表現を調整している箇所もある。

Booth, Howard J. ‘Lawrence in Doubt: A Theory of the “Other” and Its Collapse’. Booth and Rigby, pp. 197–223.

――. ‘*The Rainbow*, British Marxist Criticism of the 1930s and Colonialism’. *New D. H. Lawrence*, edited by Howard J. Booth, Manchester UP, 2009, pp. 34–58.

――, and Nigel Rigby, editors. *Modernism and Empire*. Manchester UP, 2000.

Brown, Homer O. ‘“The Passionate Struggle into Conscious Being”: D. H. Lawrence’s *The Rainbow*’. *D. H. Lawrence: Critical Assessments*, vol. 2, edited by David Ellis and Ornella De Zordo, 1992, pp. 214–25. [*D. H. Lawrence Review*, vol. 7, 1974, pp. 275–90.]

Conrad, Joseph. *Heart of Darkness*. 1899. Edited by Robert Kimbrough, Norton Critical Edition, 3rd ed., W. W. Norton, 1988. 中野好夫訳『闇の奥』岩波書店，1996年。

Fernihough, Anne. *D. H. Lawrence: Aesthetics and Ideology*. Clarendon P, 1993.

Forster, E. M. *Howards End*. 1910. Penguin Books, 1973. 吉田健一訳『ハワーズ・エンド』集英社，1992年。

Hobson, J. A. *Imperialism: A Study*. 1902. U of Michigan P, 1971. 矢内原忠雄訳『帝国主義論』上下巻，岩波書店，1978，1979年。

Jameson, Fredric. *The Modernist Papers*. 2007. Verso, 2016.

――. *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*. 1981. Cornell UP, 1982. 大橋洋一・木村茂雄・太田耕人訳『政治的無意識―社会的象徴行為としての物語』平凡社，2010

年。

Kinkead-Weekes, Mark. ‘The Sense of History in *The Rainbow*’. *D. H. Lawrence in the Modern World*, edited by Peter Preston and Peter Hoarse, Macmillan P, 1989, pp. 121–38.

Lawrence, D. H. ‘Elephant’. *Complete Poems*, 1964, edited by Vivian de Sola Pinto and Warren Roberts, Penguin Books, 1993, pp. 386–92.

――. *The Letters of D. H. Lawrence*. 1979–2001. James T. Boulton, general editor, Cambridge UP, 2002. 8 vols. 吉村宏一ほか訳『D・H・ロレンス書簡集』1–9巻，松柏社，2005–2019年。

――. *The Rainbow*. 1915. Penguin Books, 1995. 中野好夫訳『虹』『ロレンスII』新潮社，1993年，317–812頁。

――. *Sons and Lovers*. 1913. Penguin Books, 1994.　小野寺健・武藤浩史訳『息子と恋人』筑摩書房，2016年。

――. ‘Study of Thomas Hardy’. *Phoenix: The Posthumous Papers of D. H. Lawrence*, 1936, Viking P, 1972, pp. 398–516. 藤原満寿子・北崎契縁・丹羽良治訳「トマス・ハーディ研究」『不死鳥』下，山口書店，1992年，3–171頁。

Orwell, George. ‘Shooting an Elephant’. 1936. Shooting an Elephant *and Other Essays*, Secker and Warburg, 1950, pp. 1–10.　川端康雄訳「象を撃つ」『オーウェル評論集1　象を撃つ［新装版］』平凡社，2009年，19–33頁。

Said, Edward. *Culture and Imperialism*. 1993. Vintage Books, 1994. 大橋洋一訳『文化と帝国主義』全2巻，みすず書房，2005年。

Williams, Patrick. ‘“Simultaneous Uncontemporaneities”: Theorising Modernism and Empire’. Booth and Rigby, pp. 13–38.

アーレント，ハンナ『全体主義の起源2　帝国主義［新版］』大島通義・大島かおり訳，みすず書房，2020年。

麻生えりか「『虹』批評と現代社会―石炭とダイヤと工兵と」『D・H・ロレンス研究』第26号，2016年，33–58頁。

有為楠泉「*The Rainbow*における英国性と異国性」『英文学研究』第70巻第1号，1993年，19–33頁。

岡倉登志『ボーア戦争』山川出版社，2003年。

倉持三郎『D・H・ロレンスとの作品と時代背景』彩流社，2005年。

霜鳥慶邦「『セント・モア』の植民地幻想」『D・H・ロレンスとアメリカ／帝国』富山太佳夫・立石弘道・宇野邦一・巽孝之編，慶應義塾大学出版会，2008年，179–208頁。

吉村宏一「E・ガーネット宛書簡の解釈と評価をめぐって」『ロレンス研究―『虹』』D・H・ロレンス研究会編，朝日出版社，229–88頁。